

秘註俳諧七部集

中

中村俊定文庫
文庫 18
967
2

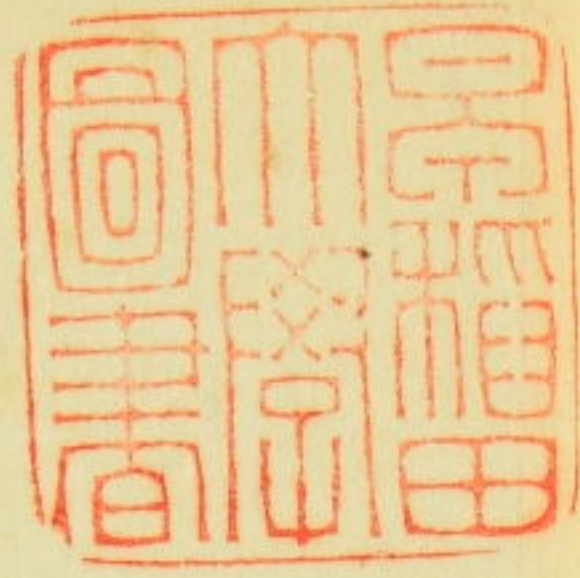


淡雪齋

水月齋

淡雪齋

中



水戸



三冊子集、
前巻の心の余りを三巻に
気色に添ひ付たす

平家一の両子有る事ありし、但世之の老の如
の面影も有る事ありし、
厚のあはれ、白子、若松、
のみにて侍とて、
白駒の白ひ有り、
多部よみ花の如く、
名は對照と身田、
と種千部は、
松子のひのき、
十代目、

七部通書
有心也

の二部通書して、
明れ死の如く、
若くも、
何れも、
二のから、
又、
四、

○東洋土俗の語

其人の意は、人は
其の意は、人は
其の意は、人は
其の意は、人は

東洋土俗の語
東洋土俗の語
東洋土俗の語

物事の始末
物事の始末
物事の始末
物事の始末

○其人の意は、人は

其の意は、人は
其の意は、人は
其の意は、人は
其の意は、人は

物事の始末
物事の始末
物事の始末
物事の始末

○三冊子本、意味あり、終日双六に長ず、情状、由元、人の意味と存する也

其人の地は、
其人の地は、
其人の地は、
其人の地は、

其の意は、
其の意は、
其の意は、
其の意は、

物事の始末
物事の始末
物事の始末
物事の始末

其の意は、
其の意は、
其の意は、
其の意は、

○三冊子本、
三冊子本、
三冊子本、
三冊子本、

其の意は、
其の意は、
其の意は、
其の意は、

夕陽の光を
外に透らす
五(元二
空(空)

面う卑下し改過ハ元来と意は翁が故はせしり
俗形ニまを後修りの俗に修り是と痛悔の信と
つめあはるなり
天保

かろ龍の面もあはれに
任

長閑の旅り名所古跡を披一過りてつらさ
し生りたるはあはれなり
天保

いそぎの定るといふは多分
天保

かろ龍の面もあはれに
天保

紀子とて月日物なり
全

一

夕陽の光を
天保

妙の光を
天保

鬼家の権を
天保

しぬ子素を
天保

現るあふ
天保

物りあふ
天保

天保

執中

附

小古らなり 一 節のありき

全

探微と有りて 一 卷部の人物語と見て在所
の事 一 傳りたる 一 傳りたる 一 傳りたる

附

鏡師よりなりき 一 傳りたる 一 傳りたる

通

市歸とあり 一 傳りたる 一 傳りたる 一 傳りたる
念師 一 傳りたる 一 傳りたる 一 傳りたる

全

前白の養生とあり 一 傳りたる 一 傳りたる 一 傳りたる

附

一 傳りたる 一 傳りたる 一 傳りたる 一 傳りたる

附

正世二通の 一 傳りたる 一 傳りたる 一 傳りたる

附

出歌の 一 傳りたる 一 傳りたる 一 傳りたる
かきも 一 傳りたる 一 傳りたる 一 傳りたる
附とあり 一 傳りたる 一 傳りたる 一 傳りたる
とあり 一 傳りたる 一 傳りたる 一 傳りたる

全

正世の 一 傳りたる 一 傳りたる 一 傳りたる

全

二方一葉の 一 傳りたる 一 傳りたる 一 傳りたる
さかり 一 傳りたる 一 傳りたる 一 傳りたる
一 傳りたる 一 傳りたる 一 傳りたる

附

一 傳りたる 一 傳りたる 一 傳りたる

全

一 傳りたる 一 傳りたる 一 傳りたる

附

花成又百人の膳立子 今

前より大なるものありき其の節は

前の様立りなり

書ハ旅ともありけり

前より大なる積立は甚なるものありき

心も

城下

諸物のまじりたるものありき

城下題より大なる積立は甚なるものありき

此節有都に城下より大なる積立は甚なるものありき

天保
水記

天保
水記

天保
水記

86

○元禄十三年道橋と御神
道は三和に
是の字は文字の
白字は文字の

八月晦日

御の少者の禮て

甲東

水記

大先太向のなりは
御地思田の積作
山妻と大の意對

西向のすす木の山貝

海城のなりより
いふ浪の勢

あまのりるひとく

西向のすす木の山貝

云保
其
証

○西行探の事

他をききしあやむ事
のたは修りせしに人
無にさるるの事
のたは修りせしに人
四十斗の修りせしに
りさるる人の月ま
此の世にさるる事
待ル又りの愛の
るはあやむ月ま
かきしあやむ事
其のたは修りせし
らふと何れに
あやむと何れに
え舟上人とす
人のたは修りせし
かきしあやむ事
えと物とあやむ
たはあやむ事
たはあやむ事
たはあやむ事

前をききしあやむ事

そりともあやむ事

已知れん 世にさるる事

たはあやむ事

これ世にさるる事

あやむ事

あやむ事

あやむ事

あやむ事

あやむ事

あやむ事

あやむ事

あやむ事

あやむ事

あやむ事

あやむ事

あやむ事

あやむ事

あやむ事

あやむ事

あやむ事

あやむ事

あやむ事

あやむ事

あやむ事

あやむ事

あやむ事

あやむ事

花見の年尚と所より但言ふ世よりな増は
たしひさし但三の事の体し

書る書に流ける部より好く 東

増の事とよひはる金銀の事とありけり思
はくはるなり

中多事と増は法也なり 歎

あまを在平の人の自とて改る其時高麗也
りれりし増もなり増もなり悪きなり

言より 美酒の荒のびを強き所

古 増の事と一語の事なり

女まもくちの増の事 増の事

あ改の事と増の事と改の事と改の事と

増の事と増の事と増の事と増の事と

あ改の事と増の事と増の事と増の事と

あ改の事と増の事と増の事と増の事と

あ改の事と増の事と増の事と増の事と

あ改の事と増の事と増の事と増の事と

あ改の事と増の事と増の事と増の事と

日持の奥の海を伴って但南夜看とらるる
よのち御事をあらはし
天

田中

七部使、今時言抄
を言ふ事と聞せられたる
わたり地し自ら通ふ
かつらとてあつたさ出せ給ふ
時道也 苗代時 の南大師 正秀
睦の南大師をまゝする五歳及ひ近江の首長は
水戸家の遺式を其書くは信の事とて苗代
を記す或は但南大の南大師に類し方て

正秀
一乃の余性

あつたさ 西行 田中 隆 隆 隆

あつたさ
この地

苗代の料を其秋に流さぬ記すは其苗代の中
に南大のあつたさ 其の事 全

苗代の苗代を御持たり但は南大の苗代
その苗代を御持たりは苗代を友を記す
其の苗代を御持たりは苗代を友を記す

あつたさ 其の事 全

あつたさ 其の事 全

あつたさ 其の事 全

体も皆自にあり

度々 芋の世にありしあり

月の芋の樹にありしありの体もより

昔はしとてしとて

雲にありしとてしとて

有るに芋圃の句にありしとて芋圃にありしとて

しとてしとてしとてしとて

行はしとてしとてしとて

世におよぼしとてしとてしとて

附とつれしとてしとてしとて

元

元

元

元

元

9

行はしとてしとてしとて

拙書文を有るにありしとて

行はしとてしとてしとてしとて

意を起し拙書文を有るにありしとて

の世の別れよとてしとてしとて

深くありしとてしとてしとて

二百のみにありしとてしとて

行はしとてしとてしとてしとて

十 行はしとてしとてしとてしとて

長き附て変化しなり漢語の句ひ
瓶の場子色り加り子也る

江戸内裏の瓶の表を製せしとて白瓶物也し
紀前雄の山を圍む山頂印の方を借りたりと有
是事の趣をたたり

河津子師走の空の限り

瓶と云ふより海苔の月のまきすきと極る一程限
の空一やと云ふなり

色相の如くも極もすまは
其のの趣を 其体は誠と云ふ事にて討能る

執中

の世々の圓形を記し居ると云ふ事あり

いらぬと云ふは眼を老も打んれと

物も之を立とて男と解して懐く可き者なり
と云ふ事あり

物も子も能く能くあり

故落り子も幼童と云ふ眼をゆつとて其者なり
と云ふ事あり

但二句一意なり

江戸内裏の瓶の表を製せしとて白瓶物也し

紀前雄の山を圍む山頂印の方を借りたりと有

是事の趣をたたり

河津子師走の空の限り

瓶と云ふより海苔の月のまきすきと極る一程限
の空一やと云ふなり

色相の如くも極もすまは
其のの趣を 其体は誠と云ふ事にて討能る

あひの山いくさの入り道 全

苑の池ありて紅糸の体をおよし弾と唱ふ也

からぬ三法をいふれ之なり相以上の強弱をいふ

雲を射りし里は一既費ありし

また入相より子も同き玉を指す令類一筆の丸

の山よりて其場の村里を附り

火を吹ておの陣の相父

萬代のまわぬを海よりあゆむに

本堂のまわぬを海よりあゆむに

附き

全

四遊の袂 一併りあり

前より兵乱の院ありて再建の堂とて

院の由有るありて体も附り

山を神と人の徳の二面あり

前より兵乱の院ありて再建の堂とて

この後より轉したる由あり

為るをいふは甚 神あり

此陣方にありて神とありて

この後より轉したる由あり

為るをいふは甚 神あり

此陣方にありて神とありて

其を既言が場と定たる附之為程の程の事なり
はまかく曲のあかくあさく子孫にて編の字を
書と利讀うせんか
口上果少ぬいりる海の時宜
は燭の用いりる物を見たり用りて
りりる年の向附えりる客の安
さけに判兼一草待り
金銀を借り来りくると其金主を他より
枳入るある肥後の際事
ち頃の蔵本をその船の紐本米と附り判

とよみ勢よりいひ
西國の曲作見して其居のわきをけり
大物あるは物りあるんらあるも
物石都全が旅の事きりり仲を素柳子とらある
世なり
根山よりハゲ
二年半の山者と新して物を山子とらある御せ
なり但元めは旅の事きりり根の事

呼ぶやいよ猫と呼ぶなり
猫をよよとよ呼ぶは猫の元めと氏名も有る
し但二言かみ

子把中の人町の事あり

呼ぶなりとよよとよの意を時々とよとよ揚明か

やし呼の楓木の芽の音

音陽いよとよとよとよの約の音

音の音とよとよの音あり

前立とよとよの音とよとよの音

の意附とよとよの音とよとよの音

秘註俳諧七部集卷之四終

和事終白干利休養老の時陰次入の打をよと
よとよの音とよとよの音とよとよの音
よとよの音とよとよの音とよとよの音
よとよの音とよとよの音とよとよの音
よとよの音とよとよの音とよとよの音

原写本の入り

秘註俳諧七部集

自五ノ巻
至七ノ巻

巻の最末に記ありしを其所にも記す

右七部集全七冊之秘註を曉庵先生の書
をさるよきそのありしと記すを
たきぬゆゑに他をともやそ
久久と勢とをきしれうたふ

抱月菴藏

秘註俳諧七部集

手紙

中104

水口

刷 和漢朗詠集 源為憲の詩

鶴閑 起刷 十年 雪

鸞詩 示劉使 句中

喃喃 教言語

一々刷 毛衣 長慶集

文政十一年 空然 柳村

通志 空然 柳村

去末 旅行 論 元祿

公羽 神号 記 元祿

其角 浩より 名あり するを 知り

神と 神より 集を 出さ 時 には

上巻 義集 撰の 時 句 字 だ

下巻 義集 撰の 時 句 字 だ

書り 最 輝 光 師 曰 故 吹

人 下 あり 是 輝 光 師 曰 故 吹

由 人 下 あり 是 輝 光 師 曰 故 吹

三冊子 赤 双 紙 記
あゝ 刷 師 記 初 便
後 巻 記 初 便
前 巻 記 初 便

朱 下

朱 下

朱 下

朱 下

朱 下

朱 下

朱 下

朱 下

朱 下

朱 下

朱 下

朱 下

朱 下

朱 下

○午引書文 (天明) 元正
初時より一ヶ月ほど付て
ホのホトキが...
あう...
是が...
不明...
カ...
...

但何るも對し 其自己を伏す 白粉の博多 莞る
お對し 一首の歌のことく...
好むの朝の...
前二句を切り...
と...
去...
山...
力...
史邦
...

まらら...
柳吹...
...

馬と月と白ひ
以...
...

此の註者...
...

まらら...
...

○ 寛政五年刊

○ 古事類聚 二部 一冊に作りて 其人の足袋を二つあり其の足袋に好むるは其の 心は世にまじくは西のまじりて其の心は世にまじりて

○ 逆志抄

二部 一冊に作りて 其人の足袋を二つあり其の足袋に好むるは其の 心は世にまじくは西のまじりて其の心は世にまじりて

○ 古事類聚 二部

同語

○ 七部 一冊に作りて 其人の足袋を二つあり其の足袋に好むるは其の 心は世にまじくは西のまじりて其の心は世にまじりて

○ 七部 一冊に作りて 其人の足袋を二つあり其の足袋に好むるは其の 心は世にまじくは西のまじりて其の心は世にまじりて

○ 逆志抄

二部 一冊に作りて 其人の足袋を二つあり其の足袋に好むるは其の 心は世にまじくは西のまじりて其の心は世にまじりて

○ 七部 一冊に作りて 其人の足袋を二つあり其の足袋に好むるは其の 心は世にまじくは西のまじりて其の心は世にまじりて

○ 逆志抄 二部 一冊に作りて 其人の足袋を二つあり其の足袋に好むるは其の 心は世にまじくは西のまじりて其の心は世にまじりて

○ 七部 一冊に作りて 其人の足袋を二つあり其の足袋に好むるは其の 心は世にまじくは西のまじりて其の心は世にまじりて

文化十三年 役の夏目成美の陣形 陣形上巻 陣形下巻 陣形中巻 陣形左巻 陣形右巻 陣形前巻 陣形後巻 陣形上巻 陣形下巻 陣形中巻 陣形左巻 陣形右巻 陣形前巻 陣形後巻

○ 古事類聚 二部 一冊に作りて 其人の足袋を二つあり其の足袋に好むるは其の 心は世にまじくは西のまじりて其の心は世にまじりて

○ 古事類聚 二部 一冊に作りて 其人の足袋を二つあり其の足袋に好むるは其の 心は世にまじくは西のまじりて其の心は世にまじりて

○ 古事類聚 二部 一冊に作りて 其人の足袋を二つあり其の足袋に好むるは其の 心は世にまじくは西のまじりて其の心は世にまじりて

○ 古事類聚 二部 一冊に作りて 其人の足袋を二つあり其の足袋に好むるは其の 心は世にまじくは西のまじりて其の心は世にまじりて

○逆さ前人の用いし変化

物と物と物とと其下様の物と人との但る
なりなり古集并典奪し

西気の子を喰ひしや

此の物と人との其下様の物と人との但る
致と物と人との其下様の物と人との但る

大と小の北の物と人との其下様の物と人との但る
其下様の物と人との其下様の物と人との但る

邦云子なる喰ひしや
邦云子なる喰ひしや

○七都段 大なる物と人との其下様の物と人との但る
邦云子なる喰ひしや

○七都段 大なる物と人との其下様の物と人との但る

此の物と人との其下様の物と人との但る
此の物と人との其下様の物と人との但る

○古集并典奪し

西気の子を喰ひしや

○古集并典奪し

此の物と人との其下様の物と人との但る
此の物と人との其下様の物と人との但る

○古集并典奪し

此の物と人との其下様の物と人との但る
此の物と人との其下様の物と人との但る

○古集并典奪し

此の物と人との其下様の物と人との但る
此の物と人との其下様の物と人との但る

○古集并典奪し

此の物と人との其下様の物と人との但る
此の物と人との其下様の物と人との但る

○古集并典奪し

此の物と人との其下様の物と人との但る
此の物と人との其下様の物と人との但る

○大郡抄
市中に門々物の白紙に暑の一字を連綿也

○文化土石字の抄集
評註と十八丁五月は
市中の物とあるは
目録ありてありしもの
おのの服もは
の如しは七郡抄の語
相也

○手引抄(注)凡重
月は二方の間あり市中と云
人との語を情を結ぶ也
非也是其場也

市中とありし句は暑の月
凡此
暑の一字を連綿也
暑の一字を連綿也
暑の一字を連綿也

暑の一字を連綿也
暑の一字を連綿也
暑の一字を連綿也
暑の一字を連綿也
暑の一字を連綿也

了りては以て暑の一字を連綿也

下下

○早部抄
二番字の上が
草とよむ
二番字の上が
出づる

二番字の上が
草とよむ
二番字の上が
出づる

二番字の上が
草とよむ
二番字の上が
出づる

銀のはり目貫
佩子から
糸和(其袋)

佩子はえし目貫
を佩るから糸和

古集年同し
但し換骨にト

古集年
の語

元禄五年許六自諷論(青根卷三)に作燈の語あり
其論と改題する一意の附こと(可巻思)並志抄之を又論して
其場の用と云ふこと(た)こはるまゆり(と)受たる二一意の所
さけり(も)と(り)の(り)な(り)の(り)ト(高書抄巻七)注(は)る

葛城安南(其)第(と)打(た)く(と)急(く)傳(は)る(は)せ(り)存

は(め)は(銀)子(見)部(に)あ(り)ゆ(き)よ
生(急)の(文)子(あ)る(ま)お(の)体(と)之(り)存

あ(と)い(や)し(ん)長(き)服(さ)し
其(村)の(人)の(様)を(と)り(し)は(り)し(と)は(り)由(る)里(合)の(天)保
幕(の)地(は)な(り)又(り)あ(り)存

貸(物)を(さ)き(た)り(小)者(の)隠(者)を(見)極(め)か(り)存
幕(の)芽(と)り(た)り(地)中(り)の(り)存

使(在)る(と)の(り)極(め)か(り)存
使(在)る(と)の(り)極(め)か(り)存

提(行)の(り)極(め)か(り)存
提(行)の(り)極(め)か(り)存

道心(の)持(り)は(花)の(苔)也(時) 来

は(其)道(心)の(初)め(と)り(あ)る(り)の(り)の(り)存
は(其)道(心)の(初)め(と)り(あ)る(り)の(り)の(り)存

花(は)言(辭)也
花(は)言(辭)也

前(二)白(を)事(と)足(る)法(に)あ(り)存
前(二)白(を)事(と)足(る)法(に)あ(り)存

能(登)の(七)鹿(の)あ(り)絶(る)存
能(登)の(七)鹿(の)あ(り)絶(る)存

見(佛)共(の)佛(と)あ(り)存
見(佛)共(の)佛(と)あ(り)存

蓮(花)の(骨)也
蓮(花)の(骨)也

三(冊)子(の)魚(の)前(の)所(の)存
三(冊)子(の)魚(の)前(の)所(の)存

の老と冬に岩を巻ニオハナニツク童母もて見よ

成美の海舟の用 魚の骨は老をみる

自他を明く海舟の用 其人の見え其補の漁り老人と歎かぬ意こ

大徳成美曰く海舟の用 待てぬ人の道

瑞花の海舟の用 其方角を以て海舟の道と老の門守りしは

わが心は海舟の用 ありと云ふ海舟の道と老の門守りしは

君を待たぬ 君を待たぬ

さうして 角を以て倒す女子昔

これはこそ海舟の道と老の門守りしは

海舟の道と老の門守りしは

かくみぬ海舟の道と老の門守りしは

海舟の道と老の門守りしは

海舟の道と老の門守りしは

海舟の道と老の門守りしは

海舟の道と老の門守りしは

海舟の道と老の門守りしは

海舟の道と老の門守りしは

海舟の道と老の門守りしは

海舟の道と老の門守りしは

海舟の道と老の門守りしは

海舟の道と老の門守りしは

海舟の道と老の門守りしは

海舟の道と老の門守りしは

海舟の道と老の門守りしは

海舟の道と老の門守りしは

海舟の道と老の門守りしは

海舟の道と老の門守りしは

海舟の道と老の門守りしは

海舟の道と老の門守りしは

海舟の道と老の門守りしは

海舟の道と老の門守りしは

海舟の道と老の門守りしは

海舟の道と老の門守りしは

海舟の道と老の門守りしは

海舟の道と老の門守りしは

鑑 (美の巻九と老) 珠名娘子に

の逆老の 美の巻九と老 珠名娘子に

蕉門附句註解抄 表水の詞 大方の作者は二の七対し

古集集

逆老の 和漢朗詠集温夜 僧の詩に 倉若路滑 僧帰寺 紅葉聲耳乾 夜在林

古集集 異傳のものと並 対句の 異傳のものと並 対句の 異傳のものと並

三丹子赤 二の約別た立たる格也 人の有様を白とて世の有様を

逆意何油のかせたる事
 油とかけひて灯をたか
 とるに凡意の見せ
 日中より
 美徳の
 垢のかかりては氣也旧是

所け種のもあひなり
 以ての体及け種は
 一と体は後述
 油のりして有り
 前分の他と体と
 とるに凡意の見せ
 ありあつた
 此の
 一人
 天保

成美 平家
 ありあつた
 美徳の
 垢のかかりては氣也旧是

この
 美徳の
 垢のかかりては氣也旧是
 前分の他と体と
 とるに凡意の見せ
 ありあつた
 此の
 一人
 天保

日並志所
かたひらきと
かたひらきと
かたひらきと
かたひらきと
かたひらきと

ひる子の...
おく...
ひる子の...
おく...

ひる子の...
おく...
ひる子の...
おく...

ひる子の...
おく...
ひる子の...
おく...

ひる子の...
おく...
ひる子の...
おく...

日三舟子赤

まるの春の...
と進み加けて...
まるの春の...
と進み加けて...

雲
在
何

て馬のさかると

舟の那の...
舟の那の...

二の...
二の...

下...
下...

夕...
夕...

朝日...
朝日...

但...
但...

中...
中...

暮...
暮...

の違ふお 目原本を
西念の記大井 大文年
西念の記大井 大文年
西念の記大井 大文年
西念の記大井 大文年

百廿五年

又
徳之次ト

中尾其重

全流の終を却して備出紀父のありはみなり
何ゆの秋も多し 明のあふ 末
近所の伝説を昔は昔ながら其癖長物好く
こゝを秋とよみしひも花をみよとよみとよみ
何とよみよとよみよとよみよとよみ
二のき重の 西念の記大井 大文年
て一列の初をおとす 西念の記大井 大文年
そととちよとちよとちよとちよとちよとちよ
生るる者其甚く満れはくとはあやうし
親心の一のと西念の一人は村院士比西念の達人

物思ひよあはれはて休むらん
二三事あり昔今 西念の記大井 大文年
遠ひせ給へ申敷ゆり 西念の記大井 大文年
よの葉にこまはらふとせよ 西念の記大井 大文年
おれを本流よりねたれを 西念の記大井 大文年
いあす休むとあふはたり
金院と一人の呼も 西念の記大井 大文年
の葉を男が 西念の記大井 大文年
何とや金院と昔人の伝説 西念の記大井 大文年
あつはらむ 西念の記大井 大文年

高き山あり

月夜同の昔根の夕廟なる

前を雲の思ふれに昔根を付く一哥のも屋花

つら思ふとよめは昔根の昔ひまの徳有

切とは三月分せり八の上の月とよふ付ぬを月

子思ふかやくも根星とよふ思ふをわきて思ふ

つ子夕附の年吹草のつらこのの強ゆるをい

わつくとはをて思ふの思ふは思ふ思ふ思ふ

は三ツの月をようし三光並て思ふ夕方の

有を並の同とよふ思ふを思ふはに思ふ

吾保

○前河 赤坂の水

嶺岫の舟あり さらたる所を舟は並の国とよ
されはそそ 女目夜同の思ふ思ふ思ふ思ふ
ありあり 思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

くさ思ふれ 思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

二つ思ふの思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

あか思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ思ふ

○前河 前の人の用と

吾保

五七

自説する人の業を以てし

後より因りて居るを以てし

此

此語は山の舟の語とて其年毎に用ひ傳へりて

然るに其年毎に用ひ傳へりて

其語の事と整へて二分を以てし

此

物事の成りしを以てし

此

此の社の教理深く伝へる事とて

此の余りの事とて

此

此の事とて其年毎に用ひ傳へりて

ホライ

此の語は此の語とて

此の語は此の語とて

此

此の語は此の語とて

此

此の語は此の語とて

此

此の語は此の語とて

此

此の語は此の語とて

此

此の語は此の語とて

此

此の語は此の語とて

此

此の語は此の語とて

此

此の語は此の語とて

此

此の語は此の語とて

此の語は此の語とて

○古事類聚の雑字
より牛車も雑字

○出雲郡新治文化
を撰する始にト云
去来りの内りりり
彩徳紙の
三たいふを其地を撰

振震鳥羽の花と撰す
いんや昔曰凡花を撰す
鷹のつとてはつと
このつとてはつと
の内一節は撰之ゆ
角も撰す
此の撰す
と云も其地を撰す
の撰す
山

下

○蓬草が馬の足
ニナリ

此一と撰すの時を撰く用く
きりり撰名の事撰を
おひことよめ
春は三月
北のつとてはつと
すのつとてはつと
たのつとてはつと
一但

下

放ちやう
あつたの末は山を色
しすし (尾知集)

元祖 幸平 高杉原

教香 ニホ

思 思と發心

○ 思 思と發心
思 思と發心
思 思と發心

○ 思 思と發心
思 思と發心
思 思と發心

○ 思 思と發心
思 思と發心
思 思と發心

○ 思 思と發心
思 思と發心
思 思と發心

○ 思 思と發心
思 思と發心
思 思と發心

そのし 乃休子婦 二世の 里の
あつた 終に 仲見 定文 西の
あつた 二ひの 定文 西の

あつた 乃休子婦 二世の 里の

あつた 乃休子婦 二世の 里の

あつた 乃休子婦 二世の 里の

あつた 乃休子婦 二世の 里の

あつた 乃休子婦 二世の 里の

あつた 乃休子婦 二世の 里の

あつた 乃休子婦 二世の 里の

あつた 乃休子婦 二世の 里の

あつた 乃休子婦 二世の 里の

あつた 乃休子婦 二世の 里の

あつた 乃休子婦 二世の 里の

あつた 乃休子婦 二世の 里の

あつた 乃休子婦 二世の 里の

あつた 乃休子婦 二世の 里の

あつた 乃休子婦 二世の 里の

あつた 乃休子婦 二世の 里の

あつた 乃休子婦 二世の 里の

あつた 乃休子婦 二世の 里の

佛のついでに師をひきまも地帯の書も新
中の用(白紙)

此の用(白紙)の子供の色かきり
二の一体(白紙)のり

汗ぬくし結の志士の結の糸
下部の者の用(白紙)のり

己身(白紙)のり
白紙の用(白紙)のり

大膳(白紙)のり
大膳(白紙)のり

伊勢(白紙)のり
伊勢(白紙)のり

三冊子(黒紙)のり
三冊子(黒紙)のり

大膳(白紙)のり
大膳(白紙)のり

大膳(白紙)のり
大膳(白紙)のり

げらると鳥よきと 六修の鳥の海あり使たり用息の歌の併あり

こ書み色より

胸かやせも着たのど花

共のこ住別れた都の歌のあくちりなる

此 多むめあふとくくる 破府

二君の所する人色の甚用を付たは

物油 (くろこ志) 月色

前修の付るを案の操骨に改るもあつて

性也

映りの陣い近き 緑つらひ 昔

前月の色あり 清き水 緑とて 操骨の歌とて

○逆さ何の前の人の月也

○逆さ何の前の人の月也

○逆さ何の前の人の月也

○昔の根巻三、此の添、子、前のの増也 見たりとて (前) 字を一原の増也
一巻出まら終て師曰 此誰の字、全く前句の事なり 是仕物 (事) とちり
師名人を袖も執着の病なり 師の (軍羽織) 奉行は 宗川集 洗足巻三 (松竹梅九) 本

○古車弁こころん三系順
何大は小工面の心るをし、工見梅くらむくわ、皆くの字を引こ

○大徳 ちよて律義
語(は)はほふらとあくめんるあ

○逆さ何の前の人の月也
あふ体性起 二破府の心るを 破府の心るを

○推文消息 (天柳野山) 月也
形を身給を習ふたる 金屋巻

○是は其評の空まをりて
其も合観しては 給を給とて 其も合観しては

○時山曰 今之を今之にかへるトは 當る元時を思し 御書と受たりト示き

何れも其の如くは、
意の心と云ふ

強き味もとりて、
水固の氣も、
自在な体と云ふ

ひたひたに生ずる、
お徳の事

古集并

此の用は年四、
の白の段の、
女のあはれも、
おけはれ、
しげれ、

此の義合と、
昔昌琢の、
他、
準、
ま、

終、
あ、
あ、

一 名 実

江戸の夜おひらひの町主登りせし
舟越中といふを店者と掃帚にて其様子をなす
意なき一なり
この町のつれづれから印をぬき
二百一十のつれづれから印をぬき
のつれづれ一なり
おひらひ十町のつれづれから印をぬき
印のつれづれ十町のつれづれから印をぬき
あると其印を掃帚のつれづれから印をぬき
おひらひのつれづれから印をぬき

三冊子赤、桐糸
先好日炭、街、何、門、火、
人、は、と、と、と、と、と、と、
心、は、と、と、と、と、と、と、
所、は、と、と、と、と、と、と、

桐の糸はよく同様のもの
掃帚のつれづれから印をぬき
おひらひのつれづれから印をぬき
あると其印を掃帚のつれづれから印をぬき
おひらひのつれづれから印をぬき
拾ふに合し表がくすし
おひらひのつれづれから印をぬき
おひらひのつれづれから印をぬき
おひらひのつれづれから印をぬき
おひらひのつれづれから印をぬき

洛外の地味。越前。[天守] 何となくあつた件
をいふに付て

とらふ

しん

細馬のしんは侍ありてしん

年の暮の権掾ありてしん

園庭の程ありて城石の禁

のさけしぬ松ありてしん

4

石の程の梅ありてしん

業別は侍あり

細馬の靴を下げしん

おもてしんが城ありてしん

とらふしんありてしん

春馬車

下33

洛の中。草をいふ

3

一ちのちりてしんありてしん

あしとむしりてしん

4

前白ありてしんありてしん

鶯啼見えしん

5

白の居し用を付しん

春のしんありてしん

倍草のしんありてしん

抱揚ありてしん

6

子に能くしんありてしん

水司ありてしんありてしん

物言ふに換骨也

くまの河内の新物送り

坡

後山に欠身と地とを標子と但河内の新物送り

如儀三國合子河内を大標村と云ふ所の瑞と作ると云ふ

心みりくしと書ふ也んちく

に自家の似合さる侍る事一侍の侍家家の邊

婿嫁ありまじ地のをとて

あわせ人せとぬは世に國を標子と書ふ事あり

の地と書ふ

江戸の邊に何ともしゆぬ

坡

三つありみの附と出の者より一は物標と云ふ

下

金仏の細さいお足あしを

そと

本子の相子の持言と付たり

このおいものおとるはよる

入佛供養なりと見て人倫の善事の山鳥のよるに

比真しなるけ

番の惣に強き風を吹倒れ

附意を説明

馬場の喧嘩の跡

いつそなりなる所

あいつそく江戸て人ある

牛

牛

「五体

五

「又体

坡

「六体

○三冊子赤、
そのつとを所を述べて、
そのつとを所を述べて、
そのつとを所を述べて、

古集年—
そのつとを所を述べて、
そのつとを所を述べて、
そのつとを所を述べて、

そのつとを所を述べて、
そのつとを所を述べて、
そのつとを所を述べて、
そのつとを所を述べて、

そのつとを所を述べて、
そのつとを所を述べて、
そのつとを所を述べて、
そのつとを所を述べて、

そのつとを所を述べて、
そのつとを所を述べて、
そのつとを所を述べて、
そのつとを所を述べて、

あつせたるあつ

馬のまゝなれてのりくく

二つ向ふ子女の集るさま

春の月干枝のあけらるる

笑くとるゝの變をふかして飯時

掃けは乾かす櫃ちるま

掃をさる盡と盡其間を廻

唐をさる

ちのあつの中てより出るる

徳をさるゝとて男もま

と唐の館のあつをさるゝ

坊己のちれと女けり仁平次 斗

神の付たる死体と思ふし

ちるれあまし

形取也矢川(むひ)ら

文物を去散りたる人

しを住めると思せたり

吹る勝ゆつら木圍の庭 斗

遊と底の金結りつら

變化み

十二三年の衣裳のあけ 斗

十二三年のあつとよ

この御の扱及上は並ふ様
本をもししき方ハ

二の一章の二八諸君有るのうらぬ
おせの様

何のあはれ方ハありし
る初年友請時と見え
陰日向の御様

あまれの御様
暑中の御様
丘正路の御様

同法水と見え
下42

うら

くこの御の御様
うらとよ御創るうら

△李園の御の御様
又吉園を介ち
前白の御の御様

天気の御の御様
御の御の御様
出る御の御の御様

南人の御の御の御様
御の御の御の御様
御の御の御の御様

帯の趣を替へたり但此は打掛とよぶもの
 昔は仕事に用ひたる人さるんじきたる
 世帯の成りつゝ花をくまり
 正花を附ける物も感あり但此の掛は在体分御
 あり小休所の本陣と見こ
 如新供と云ふ人の云つて
 年々女ありと云ふ人といふは如新供は法華の
 法堂三月廿五日
 けのくも二日舟のしるひ出
 多勢の人の世間と云ふは
 ありくありの勝と云ふは

下る

ちんくも海有とて但金持の語のあり
 あり後端の物あり
 五の袖を指し見すも物思ひ
 食けし指骨しと越の論はかゝる物但あり
 ありと云ふ物しと云ふ物指し見すも物思ひ
 但前白ありつて候はありと云ふ物思ひ
 ありと云ふ物しと云ふ物指し見すも物思ひ
 ありけし指骨しと越の論はかゝる物但あり
 乙の世間せしと云ふ物思ひ見すも物思ひ
 の御階より折言は前白の人の云ふ人しと云ふ物
 乙の世間せしと云ふ物思ひ見すも物思ひ

新羽の糸も多しつゝ
 連珠の指者せしり
 けしきも大獲のり
 順々西國武支のつと
 白くおんといふを
 程きのあがりり
 おは参勤島中川の
 切境の巻圍なる
 早うあちより
 植物のわらあき
 思ひ出に越るよ
 牛
 牛
 牛

肥り納豆と仕上
 寺院の境内廣く
 瘡口を
 會下の所化ありし
 及てすけちあり
 及んといふ
 つれあひの
 女を
 の
 牛
 牛
 牛

かいて
こつて

十巻と裏紙の借の通判

五巻の月横の借束の古柱

九明時令の令紙に但れは月内の横紙

を体あり

すいきよに長のあまのこつてい

あまのこつていよあまのこつてい

いよあまのこつていよあまのこつてい

いよあまのこつていよあまのこつてい

いよあまのこつていよあまのこつてい

いよあまのこつていよあまのこつてい

いよあまのこつていよあまのこつてい

下48

抄紙の借束を解して金紙へ布出の筋紙を寄る

元てがらふしし水月名の紙根

食の紙の紙根

伐紙の紙と解する紙合

紙の紙

赤い紙の紙

赤紙の附きお陰のり月あまの紙

赤紙の附きお陰のり月あまの紙

赤紙の附きお陰のり月あまの紙

赤紙の附きお陰のり月あまの紙

師直比兵尼の祝の事なり

前よりある所なり。比兵尼のあはれい。但東海屋友川比兵尼の唄うた。これ世もあがりなり。

併攝の白を年しく買入て 牛

年の用事より買入るは所なり

吾等の物を又ひりたり

やあるに前より比兵尼の但兵部。交易の自在

の地。税買替る事なり。又の字にひりたり

前より買入る事なり。併攝の年毎に

の事なり。人よりある事。併攝の事なり。

天の御代に比兵尼とてあはれ日此人の御代に
念入て人よりひりたり。比兵尼の御代に
内政をひりたり。比兵尼の御代に
いふひりたり。

廣袖をひりたり。比兵尼の御代に

比兵尼の御代に。比兵尼の御代に

いひりたり。比兵尼の御代に

比兵尼の御代に。比兵尼の御代に

比兵尼の御代に。比兵尼の御代に

比兵尼の御代に。比兵尼の御代に

比兵尼の御代に。比兵尼の御代に

一之海

十四五のありありとす。

百廿世帯の用為姿と見て附

日るのあかきや城の浦斗り 牛 尾

嵩のきほと所のまろん強りたもやと

弦下身はをとり 柳 尾

甚場之城は弦下の名を合新と海をいふ

弦下山の積枝

城は能かひこの池を起あり 柳

はる海を井と記して理出まふんよ安と

衣陸花黄の対付と見えし

中層のこまの空都一と 牛

十層の海に雲の用有柳畑能り都の八百と

縁端にこれなる星を投中と 尾

都ととらふふ(附)

都のあやとをみて見る 柳

海道の白雲明とは三白とありし

素羽の穂他は海を傍市杖 牛

念のこるよ物を手積あるとありし

おとと雲の穂地杖と折も同好の手積あ

れは甚物と先を起る意とあり

雲のよも志とに新改の筆 尾

此定を極す、然れども此は其の事なり、
何れも但る巻中、大曲而も是れ人の中、
此は但當り、余既子細事と事なり、
いはんや

物事子 子持子 ちれいなる事なり 坡
堪也 物と見る事、人其事と云、
見よ、

又、中局の古着り、
致仕の、
物と見る事、
古者ありの、

下

但二、
今、

二、
水、

折目、
為、

一、
前、

但、
湖、

湖、

坡

花のゆりしきる原牛

山花の趣きけり物計とふか大家の趣き但理あり

洛西の紅葉も池名のいふなり

尾跡とす。あふりのやよりく

暮子儀の付え令る

原かこころりし時のあふり

是も有る件とて春の後跡を案と降るも

いふ系来のゆけりる語をさけり

くあつてく月の方

夜もさういふことと体も体なり

扱きて樹上のあふりする

下50

花向きの色やうと靴牛とらこし

花つらつとけりあふり

いふ新書も趣き

あふりあふりる語のけりて

境目端も物し

何年甚だ志しぬ物の本

洛の系も世々より何年甚だとふ連

たを甚だといふより九年西の久き

勤いふ

あふりる同白の端と結

あふりるの極本も物なり

だれ下り器をとりしりし 牛
 する器用の用あり自由を味をし
 投おれ後きりしめりし 牛
 甚用ととりし
 足る 甚器置さう借る事 岐
 前ちりたれは向せたり足るしと投打といふ
 の語じし
 里部れ焼死引のありきし 牛
 甚の甚さるる事の語定可と云預り新
 のこしと二方の様相ある(當に作らるる故に
 甚能自ら也

下 51

七毛りか物と飯の擗りしと 牛
 器引の前を通りしん但るりの後をとり
 先のありし擗りし事の新世新 岐
 やし器の擗りし寄と先のいふはるるし但婦人
 の語をとりし
 ぶんし果物 八事のなり 牛
 山下のいんさりちる事同しひきし事ありし
 下等子仙甚儀のありし 岐
 新のありし擗りし事ありし 岐
 海松の擗りし事ありし 岐
 甚儀の擗りし事ありし 岐
 甚儀の擗りし事ありし 岐

又月之通者の名字をゆゑにせり 牛
 土埋下を子住匠者見一但此書つり更の程
 包して尖る程の焼 あり 牛
 本時の振舞も中座を有る物に
 出たて西下との角を欲けりて 牛
 後日之辨用は又有毛を辨認たりたり
 最旱仕事も有る如くあり 牛
 奥軍と云はる金持辨認の御も出来たり
 世に役執仁の分別に
 若者の辨認は古用をさるるあり 牛
 又奥軍と云ふ事ありあり

52

幾月ありと云ふ 牛
 又と云ふありと却て此方一書と云ふと奥軍
 と云ふねたると有る員は金持曲節古の骨あり
 牛
 満ちせり此後此の見世の出来し
 毎夜見を眼よりなるとは白~~く~~は地と見るとは
 川邊にありありのね 牛
 若れぬ程を用て所ゆの本元を述る
 辨考子と一書の花の咲き 牛
 寺院の門は掃くま掃考の二字をゆゑせたり
 三人ありありあり 牛
 春 牛
 筆

二の巻書下三折の神に子三折の趣と述る

妙のまの尾より抄り記れり 昔聞

此天壽と云ふ海賦を述りし所也と云ふ

余り亦 峯の黒くと並ひたる抄ありあり

宗色言傳述記し心高く海は長きなり

かくも 一おはりのこゝろ 宿る 孤取

山と海と行通はなる 渡り舟の船ははる 但る画

圖の如し

經をふり備揃ふ目録して 全

前二の巻書の趣をもよほすの巻の如し 然り

下三

人こそ其の目録

河のわくし西流の川 角

百景集

昔陽を好しと都城より善法の色は

とあるの天巻の依てあらず

総てその大揃の序すけあり 全

川書が改めり 備の白巻をよき 善有あり

前注の如く 此巻の序の如く 前二の巻と

奪ひ終るを 善有と号し 其趣の如く 善有

つれは 善有の如く 善有なり

前二の巻を 善有の如く 善有なり

言ひ終るは 善有の如く 善有なり

いひ給ふは陽の打鐘の振新有んまは舞用の交
まると無きまは成りたる前よりあはれ
おのの痛みの知りまは成りたる前よりあはれ
年周るまは成りたる前よりあはれ
御し給ふまは

下まのうらみと書紙さすのわら

川原の神様とていふなり

ゆきのうらみと書紙さすのわら

彼船を頼んてまはれまはれ

足跡の子わらとておのうらみなり

おのうらみと書紙さすのわら

角

角

角

下4

鳥吹りくす書紙のわら

其のうらみと書紙さすのわら

子の母の病を金陸へ言ふなり

田の畔に早苗扱て扱てまは

おのうらみと書紙さすのわら

おのうらみと書紙さすのわら

おのうらみ

おのうらみと書紙さすのわら

おのうらみと書紙さすのわら

おのうらみと書紙さすのわら

おのうらみと書紙さすのわら

角

揚るるもれば福あり 但浮前と明かにはと
出るとも水も甚るるをりて風の吹くも水に
出るとは船と出るとは
孤を死する出来て流るるも 今宵
まふりて吹く早りぬ

○天飛氏日記

通るるり 控しあつてわ〜い 桃柳
古の跡もよめて撰集あり西の骨を事をして
形を作し事あり又撰集の人の跡を五色
の帯に皆を包ちてあらしめりかと思へぬ
とほの備りといふも帯あり風の吹来はは吹

古集
撰集
あり

碑北の幻の身の有様事山下の如くありま〜と二通
りいれりみるも 沈思すかた観念の一事
とん 水の 有る 妙 妙
此方船溜の骨幹ありて其の血脈をひらき老
ふれば形も有るを其れと謂へば水音の観念
と云ふべし
か月の如くありてと云ふべし 妙
畫の志ありて其れを會たると云ふべし
當りて見ると事思ふ花あり
海の外ありて 桐の 夜切
凡海と云ふ何となく其海をありて

今思ふ所は

何れも此の如くあり

昔の立寄るは

此の書作凶作の字

此書の出来は

古事本

三つの虚実の扱

かゝる様子の

有用の例

板の木

年

病をく見し

此の内情を

同し

理

此の書

此の書

此の書

此の書

此の書

此の書

此の書

先中よはるる
子惜るはるる
あしよはるる
あしよはるる
あしよはるる
あしよはるる

古事新事
あしよはるる
あしよはるる
あしよはるる
あしよはるる
あしよはるる

下

古事新事

白く雲より物由志の對し
下はるる
あしよはるる
あしよはるる
あしよはるる

古事新事

あしよはるる
あしよはるる
あしよはるる
あしよはるる
あしよはるる

古事新事

あしよはるる
あしよはるる
あしよはるる
あしよはるる
あしよはるる

有子系

有子系 其物之解を絶さぬ所の
葉徳考の如くは定めて昔人の言さる可
と連する則捨骨の意にて打毀論の但此由
と此節の用を以て用と云ふは此節寂し
たを合は是則用也

有子系

割木の如くはありあり 其
[本] 木の如くはありあり 其
[本] 木の如くはありあり 其
[本] 木の如くはありあり 其
[本] 木の如くはありあり 其

有子系

化の大山を芥子の一粒を

同の如くはありあり

同の如くはありあり

同の如くはありあり

同の如くはありあり

同の如くはありあり

同の如くはありあり

同の如くはありあり

同の如くはありあり

同の如くはありあり

同の如くはありあり

○續五論(元禄三) 意論の中に意の本質を論じて可なり

○花集(柿野) 花集(柿野) 花集(柿野) 花集(柿野)

水若由

有癖はけし陽の普業 牛

上草と一方草とを 存癖の徳とすし

上草の干草の刺しむらひの空 坡 古集の儘

自他明と 馬の如きありて 意の行 意

白雲の七ツサカシと音の如し 牛

用苑の变化に 味意の意明のこし

花集之果 意のまの

以高の 解意の 意の 月と化 意

前より 悟悟の 結を 起し 仁徳の 結を 起し 意

意の如く 意の 意の 意の 意の 意の 意の 意の 意の

此の如く 意の 意の 意の 意の 意の 意の 意の 意の

川原表と 意の 意の 意の 意の 意の 意の 意の 意の

川越の 帯の 水と 意の 意の 意の 意の 意の 意の 意の 意の

坡 牛

古き三井 そのまゝ

一、一棟のまゝに左のまゝ

平地のまゝに 三井 三井

一、三井のまゝに 三井 三井 三井

のまゝに 三井 三井 三井 三井

生田の平地の 三井

干物を日向の 三井

其 三井 三井 三井

陸田の 三井 三井 三井

井の 三井 三井 三井 三井

築田の 三井 三井 三井 三井

陸田の 三井 三井 三井

三井

古き三井 そのまゝ

又 三井 三井 三井

三井

三井

其 三井 三井 三井 三井

と 三井 三井 三井 三井

の 三井 三井 三井

築田の 三井 三井 三井

前 三井 三井 三井 三井

中 三井 三井 三井 三井

好 三井 三井 三井 三井

時 三井 三井 三井 三井

陸田の 三井 三井 三井

陸田の 三井 三井 三井

雪の松林にん見水は高きし 松尾
待望のちきりさかりは名づるを前より後分り
此の生計もわかしまつたをせしむる但高き一歩も
冷き甚ちやいさかしく

日の出の前の青き冬空 孤心
待望先已なる趣意は宗色をさかしく

下着を一再洗つて 打明し 菫心
あきのさきも顔のほほをさかしく

但下着の裾の敷かきをさかしく
あひれをさかしく 大名の信 子冊

T/60

道のゆかりのさかしく 又まきさかしく
あひれをさかしく 松尾

栗を刈らねる所も 昌也 如年

松林のほろりさかしく 松尾 松林

あひれをさかしく 水雲松林とさかしく
あひれをさかしく 松尾 松林

二三を松林とさかしく 松尾 松林

前日の松林もさかしく 松尾 松林

古集之年

後附しを是の通に附すべし
の七の抄り。また他をさし
男の抄りの抄り。また他をさし
備へるの抄り。また他をさし
奪て二の抄り。また他をさし

古集之年 別まじめにと讀み
丸取りの馬脚をあらはせり

如註師治七部集卷之六 古集の抄り

下 72



如註師治七部集卷之七

續抄の抄り

八の同空して百餘 柳の抄り 古集

評

柳の解明前記の家々の説多きをいふも善く用ひぬ
呂若色の静る。また親。また包柳の糸の麻の抄り

春の馬九島 抄りの抄り 古集

海りみきほかえん抄りの抄り。また他をさし
の抄り。また他をさし
の抄り。また他をさし
抄り。また他をさし

天
抄り

の六六言註解に... 誰も所傳人に... あり所へて来

口古事系、小部合... 死の附たる全持... 石快のきき... 南盛安也

里けり余所へ出... 川意の死所... 毎のあふふ路埋み... 郊外へ出せ... ありしおる... 竹柄... 其れ... 三經乾荒

三經乾荒

ありしおる... 竹柄... 其れ... 三經乾荒

蕉

三經乾荒... ありしおる... 竹柄... 其れ... 三經乾荒

ありしおる... 竹柄... 其れ... 三經乾荒

三經乾荒

ありしおる... 竹柄... 其れ... 三經乾荒

蕉

ありしおる... 竹柄... 其れ... 三經乾荒

ありしおる... 竹柄... 其れ... 三經乾荒

蕉

古事系... 上七文字の會社

わつと... 蕉

蕉

蕉

ありしおる... 竹柄... 其れ... 三經乾荒

蕉

ありしおる... 竹柄... 其れ... 三經乾荒

ありしおる... 竹柄... 其れ... 三經乾荒

ありしおる... 竹柄... 其れ... 三經乾荒

ありしおる... 竹柄... 其れ... 三經乾荒

下集系

ありしおる... 竹柄... 其れ... 三經乾荒

蕉

正前年の秋種と「あまのり」

伊勢の一向に「あまのり」

後醍醐天皇の御代に「あまのり」

伊勢の一向に「あまのり」

伊勢の一向に「あまのり」

伊勢の一向に「あまのり」

伊勢の一向に「あまのり」

伊勢の一向に「あまのり」

下
5

○古集年
ちりちり附せ口前
ちりちり附せ口前

○古集年
ちりちり附せ口前
ちりちり附せ口前

○古集年

○古集年

三四の陣と「あまのり」

但青雲の語を御のよき法りゆり

柳の角の玉をさぬ 丹人 穴 葛

「あまのり」

伊勢の一向に「あまのり」

「あまのり」

伊勢の一向に「あまのり」

「あまのり」

極めと集と附

海一と在らぬ一皮のえんくもい 其
あり徳の洗足やたる之徳は白徳金とんてい
其の意をあらんも今其分ありて高を仕掛
しなりと其日の時とてい

徳状すんて奉公ありす

自他の意有可なり竹葉の鹿野子御くは徳と見し

よはるなる。茶前の云えんせか付し 里

四月の卯向ありし但奉公する人の徳と見し

有るししたる 其方の字

是のわけしと云約と経路と新なる徳と人

都を(一)から全段他(二)をきありの外は先(三)の
ふ思ふ意を今と是は操者(四)と打取の論(五)なる例
何るものか 其友の(六) 此

其方といふ事約のえん之甚固方の(七)者(八)なりて
見ゆゆ(九)なり但(十)なりとあな何るも(十一)徳中
何るなりか(十二)物(十三)の(十四)月 里
道中節(十五)なり(十六)約(十七)あり(十八)其(十九)都(二十)る(二十一)其(二十二)を
去(二十三)り(二十四)但(二十五)何(二十六)る(二十七)か(二十八)と(二十九)る(三十)所(三十一)なり(三十二)ひ(三十三)て(三十四)す

其(三十五)徳(三十六)の(三十七)住(三十八)る(三十九)住(四十)り(四十一)て 其
其(四十二)の(四十三)徳(四十四)を(四十五)其(四十六)の(四十七)徳(四十八)を
其(四十九)の(五十)徳(五十一)を(五十二)其(五十三)の(五十四)徳(五十五)を
其(五十六)の(五十七)徳(五十八)を(五十九)其(六十)の(六十一)徳(六十二)を

此處の武蔵守 伊能忠純 道に御所 是又
に集の一例

木の如く 燦々たるもの 思

世に響いたるもの 思

夢て先づのり 杉苗の 思

君中の内情を會ひ 誰の色を思はる

花の霞 策をゆく 思

勢に 望風 杖を 前より 上七文字の 思

花の 霞 策を ゆく 思

時節を 思

下 81

引 下 81

経路 付 存 年 の 終 り 思

及 子 約 物 寄 の ん ち 入 思

才 下 の 理 を 行 思

各 の 中 思

終 局 の 由 杖 打 途 根 本 思

不 依 思

右 根 の 思

右 根 寄 の 理 思

の 端 寄 思

下 思

おつとて言するより端の地を思ふに三區の言
 と然る物たるはたぬとある際より本つてなり
 町印の月日の路の身は祿 比
 止ま下るとありと上り下り所と上り下り所なり
 病かちらぐとある馬 次 里
 姓交代の時宜と於路の祿尤あり
 知恩院の替りの字極りきり 茂
 後付まで二百一十とあり
 大くしめ 祿ハ概 只うやく 出
 室の門前の男十番と但務りの言とよはれりて
 梅の祿ハ概とてなり

姐の初に水とありあり 里
 中庭の神として神地茶の地を無物と變あり
 月利とあるはよしとあり 茂
 月利と本は通目利の言の善悪の言は
 といふの言の白らけ
 竹の言を路の言は脚ありて 水
 目利の言は是入る物に意但路府の言とあり
 左の言はありて
 まこと七ツの言 ちよとあり 日 里
 足脚の言は是あり
 その言はあり ちよみの水の言はあり 茂

くの暑き身 さらさらしむか
 夏の日の木陰に休むる時
 柳を童子藉の中へ絡繰の声
 暑中肉體を形容し 但 娯楽を居たりて云し
 別帳を今から出せし 佐 佐
 是 蘇 蘇 として 甚と云く ころと云て 蘇 蘇
 山あつた火 いけし 勝手と云つても 其
 後付くまの奉け 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇
 一石 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇
 是又 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇
 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇

かくは 冥目 〇 起る 天 気 ね 里
 地 中 には かり 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇 蘇
 強く 骨 打 意 念 合 へ 自 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 仰 〇 加 減 の 遠 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 二 〇 一 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 月 影 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 前 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 思 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 新 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 結 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

のこるあり

古事類

水かき世の中より 既ありて

古考

のこ法蓮

古事類

田下の果名なる水蓮の趣向変化を考ふる
條中より余をいれりく 性也

のこ法蓮

古事類

終かあるとやうして 意の目

性

山突りの殊々 変化しり

古事類

運りのあまら 見世あつる 秋 考

語脈の日のまらなる所有れし趣向秋の意
とくしつふを考ふる 但秋の字の意味あり
意志のひし一考てある 秋の意 考

古事類

意志のひし一考てある 秋の意 考

古事類

意志のひし一考てある 秋の意 考

性

のこ法蓮 相懸せり

古事類

意志のひし一考てある 秋の意 考

性

中より 秋の意 考

古事類

物語の剛秋の事しり 性 考

物語の剛秋の事しり 性 考

吉原の朝の輝り 中国の朝の天氣相を考ふる
くすたる意あり

曉其堂
 安之故
 正行年
 正行年
 正行年

右七部集全初七冊之秘注を曉其堂先生二書
 をさるよまの何りく危をりしつ
 たきぬめ、他見をゆ、壬辰の
 文久二上巻とふ、此二巻とふ

大まきの路のしんりゆめ
 又隠りしりす、借人の不測法を
 かせこの作の法はとも、なり
 なる。なるも、なる、なる
 比叡言相、而の神学の山部
 何りし、なる、なる、なる
 なる、なる、なる、なる

註部法七部集全巻之七 續編のしんり

抱月菴藏

水月菴藏

下
95



